2022年5月22日 川越教会

丸山　勉

私をつなぐ鎖

［使徒言行録26章19～32節]

「アグリッパ王よ、こういう次第で、私は天から示されたことに背かず、 ダマスコにいる人々を初めとして、エルサレムの人々とユダヤ全土の人々、そして異邦人に対して、悔い改めて神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと伝えました。そのためにユダヤ人たちは、神殿の境内にいた私を捕らえて殺そうとしたのです。ところで、私は神からの助けを今日までいただいて、固く立ち、小さな者にも大きな者にも証しをしてきましたが、預言者たちやモーセが必ず起こると語ったこと以外には、何一つ述べていません。つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。」パウロがこう弁明していると、フェストゥスは大声で言った。「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」パウロは言った。「フェストゥス閣下、わたしは頭がおかしいわけではありません。真実で理にかなったことを話しているのです。王はこれらのことについてよくご存じですので、はっきりと申し上げます。このことは、どこかの片隅で起こったのではありません。ですから、一つとしてご存じないものはないと、確信しております。 アグリッパ王よ、預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」アグリッパはパウロに言った。「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」パウロは言った。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」そこで、王が立ち上がり、総督もベルニケや陪席の者も立ち上がった。彼らは退場してから、「あの男は、死刑や投獄に当たるようなことは何もしていない」と話し合った。アグリッパ王はフェストゥスに、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」と言った。

[１]　バプテスマ式に立ち会って

今日、西郷さんのバプテスマの式典に参列することが出来ました。「罪のこの身は今死にて、きみのいさおによみがえり　神の僕の数に入る　清きしるしのバプテスマ」と歌いました。私自身、その現場に立ち会わさせて頂き、大きな感動を胸に抱きました。後で皆さん、是非西郷さんに、「おめでとう！」と祝福の言葉、ご挨拶をして頂ければと思います。

使徒パウロは、ガラテヤの信徒への手紙の中で、「わたしはイエスの焼き印を身に受けているのです」（ガラテヤ6:17）と書きました。それは「わたしは神様のもの、キリストのものとされたのだ。もう何も恐れるものはない」という告白であり、讃美です。バプテスマとは、一つの言い方をするならば、目には見えない「あなたはキリストのもの」というマーク・しるしを、神様が刻みつけて下さる出来事だと言っても良いと思います。バプテスマによって、旧い己に死ぬこと（沈められること）と、復活の命の中に新しい歩みを進めること（死から起き上がる事）が一つになっているのです。私たちはみな聖霊の導きを受けた時に、主を信じる信仰が与えられるのですが、バプテスマは、その「新生・誕生」の目に見えるしるしと言っても良いでしょう。信仰者は、この新しいバース・ディを持つことが出来るのです。皆さんも、ご自分のバース・ディの日、忘れずに大切にして下さいね。

［２］ パウロの「余裕」

信仰者とは、「不気味な存在だ」と語った牧師がいます。どうしてでしょうか。主を信じる者は、詩編の中に「人はたとえ倒れても、全く打ち伏せられることはない」（詩編37:24 口語）とあるような不思議な存在であるからです。今日の箇所である使徒言行録の中のパウロは正にそのような人間だと思います。それはまた彼がコリントの信徒への手紙二の4章でこのように語っている言葉とリンクします。―「 わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています。イエスの命がこの体に現れるために」。（4:8～10）。

今パウロは、読んで頂いて分かるように、鎖に繋がれている状態なのです。自分の民ユダヤ人の祭司長や宗教学者たちから殺されそうになっている。ところが彼はローマ帝国の正当な市民権も持ち合わせていたので、ローマ帝国の為政者からすると見殺しにしては大変、裁判をしない訳にはいかないということで、このユダヤの王であるヘロデ・アグリッパ王に取り調べをさせるのですね。既にパウロは、最高位のローマ皇帝にきちんと判断してもらいたいと訴えています。

アグリッパ王は、祖父のヘロデ・アンティパスに比べれば聞く耳があったようです。26章の初めに、パウロに何でもよいからお前のことを話せ、というようなことを言います。王にすれば、ローマ総督に報告が出来れば自分の役割は終わるので、面倒なことは早く終わらせたかったに違いありません。ところが、26章をずっと読んでご覧になると分かりますが、パウロのこの「証し」を聞いているうちに、28節で王はこう言います。―「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか」と。アグリッパ王は心が動いたのですね。感動したのです。パウロという男は一体何者か、そしてキリストとは一体何者か、そういう問いが起こったのだと思います。それで十分です。そのあとは主に委ねればいい。いつの日にか自分もイエスの焼き印を身に受けたいと思う日が訪れるかもしれない。後は神様の働きを信じて行けば良い。パウロはアグリッパに言いました。―「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」―注目ワード。「神に祈ります」と言っています。これが「伝道」だと思いました。そして、この後の言葉がいいですね！「このように鎖につながれることは別ですが」。今手錠でしょうか、彼は鎖に繋がれているのですね。この言葉はユーモアではないでしょうか。余裕があるのです、パウロは。きっとその時、微笑を湛えていたと思います。不気味な存在に映ったことでしょう、アグリッパ王にしてみれば。

［３］ どんな鎖にも優る鎖

私たちにとって、「鎖」は不自由なもののシンボルと言えますよね。けれども、パウロは鎖に繋がれながら余裕がある。私は、クリスチャンとはこれだな、と思ったのです。私たちは「場」と「関係」の生き物だとある精神科医が言いました。それはある意味、「鎖」のようなものであるかもしれません。「しばり」のない人生はあり得ないのです。もちろん虐待とかいじめとかは犯罪であり、そのような人間の尊厳を破壊するようなことではなく、私たちの日常生活は、会社であれ、家庭であれ、信仰共同体であれ、そこに導かれている、神様によって置かれている、という感覚が大事なのではないかなと思いました。それはある意味「しばり」なのです。忍耐を覚えることでもあるかも知れない。若い時、私が会社に入って割とすぐに言われたことは「面白くないと思うことでも集中してやってみなさい。必ず面白さが見てくる。そして自分で工夫するようになる」ということでした。体験的に本当にそうだと思いました。旧約の「詩編」を読んでも思います。どれだけ信仰者が大変な中を生きているか。でも、その中で、その中でこそ神様の憐み、恵みを見出そうとしているではありませんか。それが、信仰に生きることです。

　そして、キリストを信じて生きる時に、周りの者がそんなにすいすい神様を信じるようになることはないですよ。誤解されたり、軋轢が生まれたりすることもあると思います。この時のパウロは、同胞から（！）殺されかけているのです。私たちは鳥のように羽ばたけず、この地べたで色々な鎖につなげられながら苦闘しなくちゃならない時があるのだと思います。私は、申し訳ないのですが、牧師になってから初めてそう思うようになりました。クリスチャン人生はお花畑ではありませんでした。「神様、どうしてこんなことが」と思うようなことが立て続けに起こってくることもあります。しかし、パウロは鎖に繋げられながら、「わたしのようになってほしい」と言ったのです！微笑みながら。何故でしょうか？それはハッキリしていると思います。どんな鎖にも優って、イエス・キリストという鎖に繋げられているからです！決して外れない鎖。いや、「天」の方が根っこのようになって、私たち一人ひとりを掴まえて下さっているのです！その証拠が、聖霊を送って下さったことだと思います。祈っている時、天から炎のようなものが降って来て、弟子たち一人ひとりの上に下った聖霊降臨の出来事。それは、「あなたを決して離しはしない。孤独にはしない」という神様の愛の確かさです。それは十字架と復活はあなたのためだったのだよという、罪深い私たちをなおご自分のものとして繋ぎ止めて下さる、神様の目に見えない鎖です！恐らく決して見栄えもせず、力も強くもない使徒パウロ。しかしまるで不気味と思えるようなパウロの余裕、パウロのユーモアは、イエス・キリストの救いの力からやってきているのです。

思えば、イエス・キリストほど、不自由を身に受けた人はいません。そもそも何故主が洗礼を受けられたのですか？「私たち罪人」の代表者となって下さるほどに、私達と一体化して下さったからではないでしょうか？彼は私たち目がけて、私たちと共に歩みたいと、あの飼い葉桶にやって来て下さったのです、そして、十字架で救いの道を開いて下さったのです。全ての人のためにです。

26章23節。「つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。」―私たちの人生には、このキリストがいます！さあ、この後、ご一緒に「主よ、我をばとらえ給え」と讃美を歌いましょう。お祈り致します。

主よ、今日のこの祝福された礼拝を感謝致します。あなたは万事を相働かせて益として下さるお方です。たとい外なる人は衰えても、内なる人は日毎に新しくされる。そのような不思議な恵みを頂いていることを感謝致します。あなたご自身が私たちをしっかりと捕えて下さっています。だから私たちは様々、与えられている命と毎日を感謝し、讃美しながら生きてゆきたいと思います。どうぞ、聖霊がいつも傍らにいて下さいますように！バプテスマを受けられた兄弟、また、私たち一人ひとりに豊かな祝福を注いで下さいますように。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。